Eureka XII

六年制通信 No.9 令和6年5月30日(木)号

随類応同は難しい

前にも書いたかもしれませんが、理想の学校とは自動車学校であると言われていません。私の知る限りでも立派な学者の方が複数同様のことをおっしゃっています。理由を聞けばなるほどで、運転免許を取るという目的がはっきりしていること。生徒はそれに向けて懸命に努力していること。従って予習も復習も、教官が言わなくてもしてくる。授業は真剣に聴き、不明なところは質問をして理解に努める。到達段階が細かく決められていて、いちいち達成度の判定が行われ、達成していないと次の段階に進めないが、このシステムに文句を言う生徒はいない。運転の技術及び知識は少しでも欠落していると事故につながるということがわかっているので、つまり命にかかわることだから、教官の判定はちゃんと受け入れクリアできるようにさらに努力をする。年齢差も問題にならず、理解度と出来具合によって同じ技量の人が集まって授業を受ける。実地研修はほとんどマンツーマンで行われ、それぞれの段階でクリアすべき項目がはっきりしている。生徒が目標に向かって邁進し、能力に応じた個人授業もあるという点で、確かに自動車学校は理想の学校と言えそうですね。

私たちの学校でも、同じ授業を聴いても人によって理解度も違だし、進路希望もまちまちだし、本当はクラス単位の授業ではなく進捗状況によってクラスを分けるのが理想のはずです。能力別クラス編成というやつです。能力別というと何やら言葉がきついで、これをやわらかく習熟度別の授業と言っていますが同じことです。こういう言い換えをして何が楽しいのか私にはわかりませんが…。人の能力や性質に応じてそれ相応の指導をすることを「随類応同(ずいるいおうどう)」と言います。ちょっと難しい言葉ですが「類に随い同に応ず(るいにしたがいどうにおうず)」ということです。自動車学校の例を考えると、これが最も教育効果の上がるやり方でしょうが、私たちの学校と自動車学校では大きな違いがあります。それは、自動車学校は教科が一つしかないということです。しかも、その教科を習得したいと強く願っている人しか入学しません。当たり前ですが、ここが大きく違います。君たちは多くの教科を、望むと望まざるとにかかわらず習わなくてはなりません。教科が多いと、その全てに「随類応同」を適用するのは難しいですね。そもそも物理的に授業が組めないです。どうでしょう、できても英語数学の二教科くらいではないでしょうか。

すべての教科に情熱をもって取り組める人もいるのかもしれませんが非常に少ないでしょうね、そういう人は。普通科の学校にはどうして多く教科があるのかと、疑問に思う人も多いと思います。共通テストにはあっても大学の個別試験から除外されて

いる科目、例えば「古文・漢文」など、必修科目にする必要はないのではないかという言説はよく見聞きします。数Ⅲなど必修でない科目もありますからね。ほとんどの文系の大学が「古文・漢文」を除外している現状を見ると、これらを勉強している時間を他の教科に充てられたらと思う人は出てきても不思議ではないと思います。しかし、普通科の学校で習う教科が必要かどうかを大学の受験科目にあるかないかという指標で決めるのは乱暴です。そう思いませんか。国民の全てが大学受験をするわけではないのですから。私は古文や漢文の時間をもっと潤沢にとってもいいと思っています。大人になって役に立たないことは学校で教えなくていいといった議論もありますが、あれは間違っています。小学生から株の勉強をすとか、IT 関連の知識を教えるべきだとか、それらこそ必要だと思う人が自動車学校へ通う熱心さで勉強すればいいのです。大人になってから独学で。その時、解説書に書いてある言葉や数字や表などを正確に読み取る力をつけるために中学・高校の勉強があるのです。学校は「学ぶ機会」の場として機能します。学校は、機会を与えられないと自分では触れることのない科目（体育でもいろんなスポーツをしますよね）、そして最初から一人では独習の難しい科目、それらを勉強する場でもあるのです。また、もし、学校から理科をなくしたらどうなるか。恐らく 10 年もたてば日本人の誰もが科学に敬意を払わなくなるのではないのでしょうか。古文や漢文は私たちの先祖の経験だと言っていいと思います。いわば文化です。生徒諸君には文化に対する敬意を持ってほしいと思います。

今週のおすすめ

・柴崎友香 『百年と一日』 （ちくま文庫）

不思議な短編集、としか紹介のしようがない。まず一つ一つの物語のタイトルが長い。例えば「一年一組一番と二組一番は、長雨の夏に渡り廊下のそばの植え込みできのこを発見し、卒業して二年後に再会したあと、十年経って、二十年経って、まだ会えていない話」、これが最初の短編。どんな話か想像できそうでできないでしょ。あるいは「屋上にある部屋を探して住んだ山本は、また別の屋上やバルコニーの広い部屋に移り住み、また別の部屋に移り、女がいたこともあったし、隣人と話したこともあった」なんてタイトルもあります。全 34 話。どこから読んでも問題なし。どの話も簡単に要約できるようで、こんな話ですよと言ったとたん、いや違うかもと思ってしまう、そんな短編ばかりなのですが、これじゃ余計わからなくなりますね。

私もよくわからなくなったので解説を読むと、柴崎さんがどういうつもりでこの作品群を書いたのかがわかりました。「時間が経つ話を書きたいんです」とのこと。なるほど、これはこの作品群に共通するテーマには違いないですね。また、こうも言っています。「場所はそこにある時間とか過去とか、あるいは誰かの記憶とかそこに居た人の経験みたいなものをつないでいるものなんじゃないかなと思って、そういうものを自分は書いているのかなと」と。この柴崎さん自身の言葉を読んだうえで作品群を読むと、作家の想像力を純粋に楽しめるかも。

BGM は ハイ・ファイ・セット の フィーリング でした…。